

分担研究者 小川敬之

九州保健福祉大学大学院 教授

研究要旨:

目的:アルツハイマー型認知症(以下 AD)は脳の機能障害に応じた症候を呈し(失行、失認、前頭葉症状など)その理解と行為の整理は生活支援を行う上で重要である。生活行為をビデオ撮影することで動作をより詳細に分析でき、行為障害の意味づけと、支援のタイミングなどを探ることも可能である。今回、調理場面(芋を切る)の場面のビデオ撮影を行い、行為解体の意味づけと介入の糸口について考察することを目的とする。

対象:A氏 70歳代 女性 診断:AD FAST stage:5a MMSE:5点

方法:みそ汁に入れる芋を切ってもらった場面をビデオに撮影し、動作分析を行った。

結果:里芋を切る場面では、ぬめりがありスムーズに包丁を使うことができず、切ることに苦労していた。そのうちに切った里芋を移動させたり、包丁を持った手と里芋を取る手が交差するなどぎこちない動作が出現してきた。そのうちに、まな板ではないところで一生懸命里芋を切ろうとする。しかし、優しく困っている様子が伺えたタイミングで「こちらで切ったらどうですか?」というまな板の上に里芋を持ってきて切ることができた。

まとめ:自動的に行える行為(implicit)では混乱もなく遂行できることが多いが、目の前の状況に合わせながら行う行為(explicit)では視覚情報から動作に結びつけることができず、混乱が生じているものと考えられる。「うまくできる」「戸惑う」が継ぎはぎのようになりながら一連の動作が遂行されていく。そうした混乱とワーキングメモリーの低下が加わることで、中央実行系の機能低下を誘発し、今行っている活動が、全体の中でどこに位置し、その先どのように遂行したらよいか見当がつかない混乱に陥っているものと考えられる。このような場合、手が交差するなど混乱が見え始めた時に、ご本人のプライドを傷つけないように動作をサポートする、代わりに行うなど、行為の流れをなるべく止めないような雰囲気を持続する、または横で同じ動作を一緒に行うなどの手がかりを提示することで混乱の度合いを軽減できる。

A. 研究目的

アルツハイマー型認知症は脳の機能障害に応じた症候を呈し(失行、失認、前頭葉症状など)その理解と行為の整理は重要である

(impairment)。しかし、症候の出現も個人のパーソナリティや習慣(narrative)、その人を取り巻く人的・物理的環境(environment)により様々な修飾がなされ個別性の高い状態像を呈する。この関係性を念頭におきながら日常生活の行為障害を把握(評価)し、適切な対応や環境調整を行うことが認知症の人の生活支援には必要になってくる。朝田は認知症の生活行為の障害を整理する視点として「認知症のステージ、基礎疾患により異なる」「障害の成因と治療標的は認知機能、精神機能、身体機能だと認識すること」と述べ、行為障害の脳科学の次元で抽出・整理する必要があることを述べている。また、GitlinらはADの作業療法実施にむけて、

様々な生活行為(occupation)に影響を及ぼす認知機能を評価し、どこで行為がつかずくのかを整理し、介入のポイントを探る重要性を述べ、Corcoranらは認知機能に課題を持った人の行動に即した活動提供を行うこと、また行動を起こしやすい環境整備を行うことで介護者の介入をスムーズにすると述べている。今回、調理場面(芋を切る)の場面のビデオ撮影を行い、行為解体の意味づけと介入の糸口について考察したい。

B. 研究方法

【対象】

A氏、70歳代、女性、診断:AD、FAST stage:5a、MMSE:5、整容、入浴動作など促しが必要である。混乱するとウロウロと歩き回ることが多い。指示動作入りにくい(椅子に座ってくださいと言うと、本人は座る意志があ

るようだが座り方がわからないと様子)。食事動作、歩行は問題がない。専業主婦であり、お茶の準備や食事の支度の場面になると、カウンターに来る。しかし、モノを触ったり、近づいたり離れたりするだけで、何かしたい(手伝いたい)がどうしても良いかわからないといった行動をとることが多い

【分析方法】

デイケア内にてみそ汁に入れる芋を切ってもらった場面をビデオにて撮影し、動作分析を行った。

(倫理面への配慮)

ご本人・ご家族に口頭にて研究の趣旨を説明し、個人が特定できないように書類の作成を行う事などを説明し同意を得ている。

C. 研究結果

お昼の味噌汁に入れる里芋と大根を切ってもらった。里芋ではぬめりがありスムーズに包丁を使うことができず、切ることに苦労している。そのうちに切った里芋を移動させたり、包丁を持った手と里芋を取る手が交差するなどぎこちない動作が目立ってくる。そのうちに、まな板ではないところで一生懸命里芋を切ろうとする。しかし、優しく困っている様子が伺えたタイミングで「こちらで切ったらどうですか?」というまな板の上に里芋を持ってきて切ることができた。

D. 考察

自動的に行える動作(implicit)では混乱もなく遂行できることが多いが、目の前の状況に合わせながら行う動作(滑って固い里芋を何度も固定しながら行う行為:explicit)は混乱が生じたもの考えられる。「うまくできる」「戸惑う」が継ぎはぎのようになりながら一連の動作が遂行されていく。そうした混乱とワーキングメモリー(課題行動を実行しながら、課題遂行に必要な情報を一時的に活性化状態で保持する機能;Baddeley,A.D,1986)の低下が加わることで、中央実行系(ワーキングメモリー内の情報を統制、制御し、言語理解、推論、精密化、リハーサルなどの高次の認知活動に必要な選択的注意、複数の課題同時遂行、長期記憶の活性化などの処理の実行とその結果の一時的な保持をつかさどる:Central executive system;Baddeley & Hitch,1974)の機能低下を誘発し、目の前で行っている活動が、全体の中でどこに位置し、その先どのように遂行したらよいかという混乱に陥っているものと考えられる。

このような場合、手が交差するなど混乱が見

え始めた時に、ご本人のプライドを傷つけないように動作をサポートする、代わりに行うなど、行為の流れをなるべく止めないような雰囲気を持する、または横で同じ動作を一緒に行うなどの手がかりを提示することで混乱の度合いを軽減できる。

このような介入の難しさは個別性が高いことにあるのだが、前述のことを意識しながら、対象者の性格や作業のこなし方などそれまでその人が培ってきた行動様式を知ること、情報を集めることが支援の鍵ともいえる。

E. 結論

生活行為は一瞬たりとも止まることはなく、時系列のなかで遂行される。今回の里芋を切る動作もほんの数分のことであり、その短い時間の中でADの人は混乱を呈し、生活行為の解体が起こっている可能性があることが伺えた。認知機能障害の影響を考慮しながら、行為と活動のマッチングを考える。さらに、周辺環境要因や個人の性格を考えながら、その時、その瞬間というタイミングを考えた介入方法を模索する必要がある(Trial & Error)。生活行為の細かな分析を行い、どの部分で遂行困難になっているのか、さらに多くの行為で分析していく必要性を感じた。

F. 健康危険情報

なし。

G. 研究発表

1. 論文発表

- 1) 小川 敬之,多職種協働のADL支援 在宅におけるADL指導・地域社会におけるADL指導 地域資源を活用する作業療法の可能性 老年精神医学雑誌 28(9): 1014-1020, 2017
- 2)小川 敬之,呑海 沙織,成合 進也.Dementia Friendly Social-Resourcesの創生 老年精神医学雑誌 28(5): 477-484,2017

2. 学会発表

- 1)田平隆行,堀田牧,村田美希,吉浦和宏,石川智久,小川敬之,森崇明,吉田卓,池田学.加齢による初期AD患者のADL/IADL自立度低下の特徴.第92回 日本老年精神医学会,名古屋,6月14-15日,2017,口頭発表
- 2)村島久美子,片山智栄,遠矢純一郎,小川敬之 都市部における認知症初期集中支援チームの在り方と作業療法士の関与 日本在宅医学会大

会 19回,2017

3) Noriyuki OGAWA ,Takeshi YOSHIDA.
Community Based Occupational Therapy
in Japan-Social participation- 32th
International Conference of Alzheimer's
Disease International p606, 2017

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得

なし

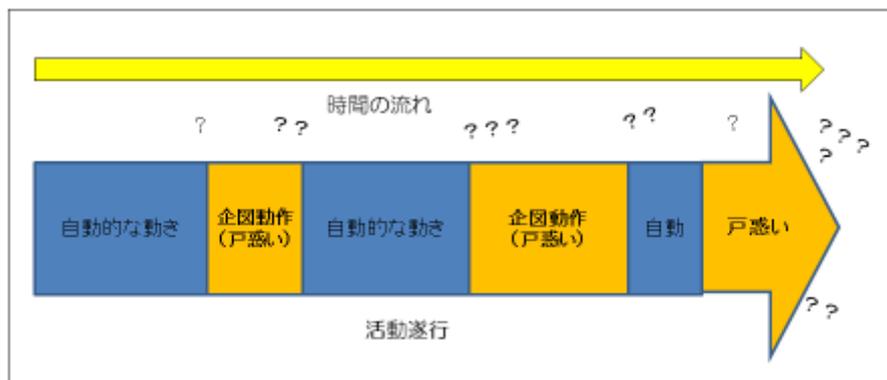
2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

図1 みそ汁に入れる芋を切ってもら場面



活動遂行における行為解体のイメージ図